
カケられた男

星空の闇に消えた男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カケられた男

【Nコード】

N2006G

【作者名】

星空の闇に消えた男

【あらすじ】

通勤ラッシュで混雑する都内の地下鉄の駅において、若い女がホームで悲鳴の声を上げた。何やらすぐ側にいた男にチカンをされたらしく、疑いを掛けられたのは、眼鏡をかけたサラリーマンの男。自分は全くしていないと彼は即否定するが、出勤途中にもかかわらず被害者と名乗る女らと、一緒に警察署に連行されてしまうハメに…

「いやだ、すいません。この人あたしにチカンしましたあ」
鉄道警察隊の特務係が近づいてくる。

「いったい、どうしました？」

二十歳前後の若い女は、泪ぐんだ眼で職員の手を掴む。

「この眼鏡を掛けたスラッとした男性が、わたしの胸に肘で触れてきたんです」

「な、何言ってるんだお前。そんな事は誓ってしていませんよ」
眼鏡を掛けた男は直ぐさま弁解した。

「俺達見たぞ。あんたが微妙なタイミングで、彼女の胸つつくところを」

二人の若い男が傍に近づいて来て言った。どうやら彼等は目撃していたらしい。

「つつくも何もやってないって！痴漢冤罪だ、これは！」

眼鏡の男は声を震え上がらせ、駅のホームで叫ぶ。

事件は朝の八時半、通勤ラッシュの時間帯に起きた。恵比寿から地下鉄に乗り入れ、今降りたこの日比谷駅の手前で痴漢をされたと女は言う。若い男二人は、被害者と名乗る女と痴漢をしたとされる男のすぐ側にいたらしい。痴漢なんかしていないと訴えかける眼鏡の男は、満員電車で大変混雑していたため、その二人の若い男が傍にいた事なども眼に入らなかった。

「とにかく一度、丸の内署まで同行してもらおう」

眼鏡を掛けた男と若い女、そして二人の若い男は駆け付けて来た別の警官に連れられ、取調室まで行く事になった。

（これから会社だつてのにまいったな、ったく…）

男は仕方なくうなだれて歩いていった。

眼鏡の男が言った『痴漢冤罪』は、近年増加の一途を辿っている。被害者である女が痴漢されたと単に誤認した場合はさておき、示談

金目的や遊び感覚で男性を女性が、実際痴漢してもいいのに痴漢扱いしてしまうケースも少なくない。そして、仮にこのような痴漢していないのに逮捕・勾留された場合、罪を認めるまで留置場から出してもらえない事もあり、肉体的・精神的に想像以上の苦痛を被ってしまうことになりかねない。裁判の判決までも一、二年待つ事になってしまったため、会社での立場や家族の心情を考え、実際に痴漢はしていなくても、前科を受ける代わりに罰金三〇五万円を払って脱出する人が多いのも現状である。

未だ眠い朝の陽の光に、竄れた表情で痴漢の嫌疑を掛けられた男は、もう一日終えて疲れ果てたように取調室の椅子に腰掛ける。

「何度も言いますが、私は……」

眼鏡の男は、もう弁解するのも怠そうに言いかけた時、

「黙って落ち着きなさい。あんたの名前、あと住所は？」

「梅島一也といいます。練馬区高野台……」

頭のうっすら禿げあがった取調べの刑事は、一々尋ねては押し黙ったまま、被疑者の名簿に彼が言った事を億劫そうに書き込む。隣の部屋では壁越しに、二十歳前後の華奢〔きゃしゃ〕な身体の女と、それと同一年くらいの茶髪の若い男二人が、延々と何やら話している声が聞こえる。おそらく、されてもない痴漢の詳細を真剣にでっちあげているのであろう。その後やがて暫くすると、彼らの声は止み、室内から立ち退く音が聞こえた。

“バンッ”といきなり事件簿を叩きつけ、

「何で痴漢なんかやったんだ！」

と、禿頭の刑事は頭ごなしに彼を怒鳴りつけた。梅島は、幾分ずり下がった眼鏡を左手の中指で忙〔せわ〕しそうに戻しながら、幾分和らいだ声で

「で、ですから刑事さんこそ落ち着いて聞いて下さい。私は意図的に彼女の胸なんか肘で突いていません。ラッシュ時間のぎゅうぎゅう詰めの中、身体がその時偶然に触れてしまっただけです」

「白状するまで出られないぞ」

刑事は、鬼のように屹度睨みつける。

これは己んぬるかな、と思い始め、肩を竦〔すく〕めて面〔かお〕を俯けたまま沈黙を守っていた時、別の背の高い若い刑事がドアノブを力強く握り締めて入ってきた。

「角川さん、今回もひよっとすると“触らせ屋”が関与しているのかもしれない」

「何、また例の連中が…か？」

『触らせ屋』とは、数人でグループを組んでわざと痴漢行為をさせ、示談金等を詐取する一種の当たり屋的連中である。先日、同じ日比谷線内の広尾で起きた事件もこの連中が関与している可能性があるかもしれないと、正義感に溢れた眼でその若い刑事は憂えていた。

（はっ、そういえば何となくあの時、押され方がちょっと強引で不自然な気がしないでもなかったなあ。女のほうも、なんかわざと自分に近づいてきたような気がするし…）

ふと幽かではあるが、梅島の脳裏に日比谷駅を降りる手前の出来事が甦ってくる。その曖昧な始終を二人の刑事に説明しようと喉元まで出かかったが、

「……すみません、私がやったんです」

心のどこかで現状に対する諦めの気持ちがあったのかどうかかわからないが、会社にも家族にも心配を掛けたくないため、冷汗を頬に一筋垂らしながら一瞬だけ顔を大きく上げて、偽りの一言を打ち明けた。

「嘘を付かなくても大丈夫ですよ。今朝一緒に居合わせた彼等の衣服からも、後日指紋を採取してみましよう」 背の高く未だ若そうな感じの、妻木という刑事は、彼に無実の罪を着せないように温かく庇ってくれた。

表情には現れなかったが、ようやく何とか些かではあるが、梅島の胸裏には安堵感が広がってきた。そして、自身を活気づけるよう

に言ったのであった。

「刑事さん、頼りにしています」

(後書き)

2008年10月3日付の、上毛新聞の文芸欄に掲載された掌編小説を、補筆した作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2006g/>

カケられた男

2010年10月28日01時01分発行